No.0 no Agasion !

軽い雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｏ．０　ｎｏ　Ａｇａｓｉｏｎ　！

【Ｎコード】
Ｎ８５７５Ｚ

【作者名】
軽い雪

【あらすじ】
狭間に生きる物の力を手に。
――気がついたらピンクブロンドの少女に覗き込まれた。

これは『Ｎｏ．０！』のオリ主がルイズに召喚されたｖｅｒ。
オリ主、最強等、に不快な思いをする場合はプラウザバァーック！

＊転生までの行程は省略されました。（前書き）

一回血迷って消しました、お気に入りしてくれていた人達、ごめんさい。

では、本編をどうぞ。

＊転生までの行程は省略されました。

「クソ…神の奴、覚えてろよ…」

ドスッ、と地面に叩きつけられた。
青く澄んだ、抜けるような青空。
意識を取り戻せば、最初に目に入ったのはその空と…

「あんた誰？」

ピンクブロンドの、如何にもな不機嫌顔をした少女だった。
鳶色の綺麗な目だった。

「隣の田中です」

「…タナカ？」

☆　（Ｔａｋｅ２）

「あんた誰？」

そう訪ねた人物は、外国人の少女であった。
黒いマントに白いブラウス。グレーのプリーツスカートを着たその

少女は、
まるで現実にあって欲しくないような…兎に角呆れた顔していた。
透けるような白い肌、そしてウェーブの掛かったピンクブロンド。

「（あれ、日本じゃねえの？）」

俺と言えば、まさか外国に飛ばされたのか、とドキッとなったが、
行成ペラペラの日本語で
目の前の少女が話し始めたのだ。…すげえ、この外国人さん。

「（…何このフード、角度的に見えないなんて可笑しいわよね…？）
」

「…村雨陸兎（むらさめりくと）だ。」

「…むらさめりくと…？どこの平民？後なんなのよこのフード」

フードをぴらぴらと捲って俺の顔を睨む少女。…なにやらフードが
気になって仕方が無いようである。
というか、フードはフードだろ。…この世界ってフードなかったり
するのか？

俺はサッと周りを見回す。何やら少女と同じかっこをした少年少女
が、棒を持っている。

――杖？

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で…平民呼び出してどうするのよ？」

赤い流れるような髪の毛の少女が同じく、俺の顔を見ようと体を動かしながら言った。
――どう見ても人間だろ、貴方の目は節穴なのか。…にしてもデカいな…おっと。
俺の顔を不思議そうに見ている二人以外が笑った。

「ちょ、ちょっと間違えただけよ！…それにしても中が見えないわね」

見えない、んな冗談か。
だって、間を置かれたんだよ？自分姿ちゃんと望み通りになってるのか冷や冷やした。
取り合いず、フードを脱ぐ事にした。

「…あら、平民さんにしてはカッコイイわね」

有難う、悪く言って悪かった。アンタいい奴だ。フレイムヘアー。
息を飲む声と鼻を鳴らす音が聞こえた。…どうやら興味の無さそうだった人物の視線まで集めてしまったらしい

視線が痛い…。

「間違いって何時もそうじゃん」

「流石はゼロのルイズだ！平民を呼び出すなんてｗｗ」

「おいそこ雑草生やすな」

どうやら、この馬鹿にされている少女はルイズというらしい。
何故馬鹿にされているのか、他にも色々気になるが…。

「なぁゼ「ミスタ・コルベール！」…。」

質問しようとしたら遮られた。
タイミング読んだ結果がこれらしい、割り込めばよかったか？

芝生が風で揺れる。…新鮮な空気、心地よい風。
…ここまで空気が上手かっただろうか。都会暮らしで無かったがここまで上手い空気を吸ったのは初めてだ。

間もなく、人垣が割れ、モーゼが現れた。…じゃなくて、中年のハゲたおっさんが来た。
何故か寂しい気持ちにさせられる。くそ、神め。こうなるんなら育毛剤も頼むべきだった。

大きな木…ロッドか？を持ち、真っ黒なローブに身を包んでいる。
どうせなら、その黒さが頭にももう少し有れば良かったのにな。…
余計なお世話？五月蝿いんだよぅ。

いい年乞いて、魔法使いのコスプレか。ヤケになったか？
…もういい、一先ずハゲから逃げよう。

「こんなの納得いきません！もう一回！もう一回！お願いします！」

少女ルイズはハゲベールかコルベールかに凄い勢いで捲し立てている。
何をもう一回なんだ、まだまだ転がるのか？
ろーりんがーるは今日もゆっくー。

「なんだね、ミス・ヴァリエール」

「あの！もう一回、召喚させてください！」

召喚（サモン）？何か召喚するんか。
周りを見回してみた、視界にデカいモグラとそれに抱きつく少年を見つけた、目を背けた。

――何だアレ。

ただ、今ので十分だった。ここぁ、俺の知ってる世界じゃねえ。
動物図鑑を何ども舐めまわすように見た俺が言うんだ、あんなモグラ現実(リアル)にゃ居ない。
まさか、初めて現実じゃないと実感した理由があんなのになるとは…俺にも触らせろ。

「それはダメだ。ミス・ヴァリエール。」

「どうしてですか！」

「決まりだよ、二年生に進級する際、君たちは『使い魔』を召喚する。
今、やっている通りだ。」

「…」

口を挟みたくて仕方ないが、空気的な意味で読まないと駄目だな。
キャーイクサーン…あれ、合ってたっけ？あの、『空気を読む程度の能力』の人。
いかんな、記憶が薄い。

「それによって現れた『使い魔』で、今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。
一度呼び出した『使い魔』は変更することは出来ない。何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。

好むと好まざるとかかわらず、彼を使い魔にしなければならないんだ。」

「そんな！でも平民を、使い魔にするなんて聞いたことがありません！」

少女ルイズの言葉に、周囲がどっと笑う。
その話題である俺というと、浮かぶ目ん玉を見てギョッとしていた。
――アッーリマン？…モグラのほうが数杯可愛いじゃないか。

春の使い魔召喚。
…成程、それで『ゼロの使い魔』ね。…いや適当な推理ですＷＣにでも流してください。

「これは伝統なんだ。ミス・ヴァリエール。例外は認められない。例え彼が…」

「指指すなヴォケぇ」

教師のくせに人を指さすなよ。知ってるか？指差しっていうのは一つの呪い関係の行為だった筈。

「…。た、只の平民かもしれないが、呼び出された以上、君の『使い魔』にならなければならない。
古今東西、人を使い魔にした例は無いが、春の使い魔召喚の儀式のルールはあらゆるルールに優先する。
彼には君の使い魔になってもらわなければな。」

「そんな…」

がっくりと肩を落とすルイズ。

「さて、では、儀式を続けなさい。」

「えー、彼と？」

「そうだ、早く。次の授業が始まってしまうじゃないか。君はどれだけ時間を掛けたのだと思っているのだね？
何回も何回も失敗して、やっと呼び出せたんだ。いいから早く契約したまえ。」

そうだそうだと野次が飛ぶ。

「ねぇ」

「なんだ？」

「…、アンタ、感謝しなさいよね。貴族にこんな事されるなんて、普通は一生ないんだから。」

「何が？」

「え、いや、だからその…」

赤く頬を染めて言いにくそうにしている。
――と、急に諦めたようにルイズは目を瞑って。
手にもった棒…杖を俺の前で振るい、

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。
この者に祝福を与え、我使い魔となせ。」

呪文らしき物を小さな声で呟いて。

「ちょっと、屈みなさいよ。契約が出来ないじゃない。」

オイ待て、そんな顔を赤く染めて言う事って嫌な予感しかしねえ。
取り合いず、指示通りにしゃがむ。
そして近づいてくる少女ルイズの唇。
反射神経でかわした。

「「…。」」

何事も無く再開し始めたので再び回避。

「ああもう！じっとしてなさいよアンタ！」

さらば、俺のファーストキス。
神回避二回目で拘束され、強引に唇を奪われた俺だった。

そんな、フェオの月（五月）。

Ｎｏ．０とゼロが交差する時――！

――物語は始まる！

＊転生までの行程は省略されました。（後書き）

（＊神による申請により、転生シーンは映されませんでした。）

〜〜次回予告〜〜

「アンタ…メイジだったの！？」

「いいえ、ケフィア…じゃなくて違います」

＊コントラクトとエクスプロージョンは痛いようです。（前書き）

はっちゃけました。後悔はしていない。

＊コントラクトとエクスプロージョンは痛いようです。

ＳＩＤＥ　Ｒｕｉｚｕ

「照れるぐらいなら自分でやるなよ…」

「うっ、五月蝿いわね！アンタが平民の癖にそんなカッコイイのが悪いのよ！」

「な、何その理不尽な怒り」

私が呼び出したのは平民だった。
あれだけ強く、誰よりも高く叫んだと言うのに、出てきたのは真っ黒いローブを着た平民だったのだ。
正直、私は愕然とした。

――だが、この男。随分と不思議な男だった。

まず初めに着ているローブ。これだけじゃ只の黒いローブ。
問題なのは、フード。仰向けに倒れていたのだから太陽の光で確実に中は見えた筈…。
だけど、どの角度から見ても顔が見えなかったのよ。
フードを脱いで初めて顔が見えた。…きっとマジックアイテムの類なのかもしれない。

だとしたら、この男は実は凄い奴なのかもしれない。

二つ目は、この男…名前が変。
ムラサメロクト…？そんな名前だっけ。
これは後で問いただせばいいわよね。いえ、後の他もね。

三つ目は、平民にしては顔立ちが綺麗すぎる。
貴族出の男なのかも、と思い冷や汗が流れた。…でも、言動のそれは平民の物と同じ。
貴族かどうかを決めるのにも証拠が足りない、でも平民と決めるにも証拠は足りない。
――でも、貴族だったら普通は名乗り出るはず…。

ダメね、私。弱気になっちゃダメ。
従順な犬になるまで躾なきゃ！

☆

契約の為とは言えキスをした。…初対面で時間もそこまでたっていないというのに
何故か、ドキドキしてしまう。

「俺のファーストキスが…」とか言ってるけど、

「わ、わた、私のほうが恥ずかしいんだからねッ！」

今日の私は体調が悪いのかもしれない。

☆

ＳＩＤＥ　Ｒｅｔｕｒｎ　ＲＩＫＵＴＯ

契約、使い魔。
どうやら俺は、頬を染めて睨んでくる少女ルイズの使い魔となってしまったらしい。

「『サモン・サーヴァント』は何回も失敗したが、『コントラクト・サーヴァント』はきちんと出来たね。」

アリエール…じゃなくてコルベールが嬉しそうに言う。

「相手がただの平民だから『契約』出来たんだよ」

「そいつが高位の幻獣だったら『契約』出来ないだろうね」

何人かの生徒が笑いながら言った。

ほほう、いい度胸じゃないか。…幻獣には遠く及ばないかもしれないが。見返してやろう。

よし、明日から本気だす。

「バカにしないで！たまには上手く行くわよ！」

「ほんとにたまによね。ゼロのルイズ」

見事なロール。うほっ、良いロール。

「ミスタ・コルベール！『洪水』のモンモランシーがわたしを侮辱しました！」

「誰が『洪水』ですって！私は『香水』のモンモランシーよ！」

うん？…さっきから『洪水』だとか何だとか…何のことだろう。

「あら、貴方、二つ名も知らないの？」

「うんむ、なるほどね、ありがと…えーと？」

「私の名前はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー　。」

らめぇー、胸を張って自己紹介しないで！
目のやり場に困る！胸的な意味で！

「え、キュルケ・アウグェス…」

「キュルケでいいわよ。貴方の名前は？」

微笑んでキュルケと呼ぶ事を許してくれた。
うーん、貴族って堅い奴らばかりじゃないらしい。
堅苦しいイメージがあるからなぁ…貴族様。

「俺の名前は村雨…ぁー、リクトって呼んでくれ。」

「リクト…？奇妙な名前ね。何処に住んでたの？」

「（リクトって案外普通だと思うんだけどな？）福岡県出身さ。」

「フクオカケン……？…それって何処よ？」

俺の言葉にキョトン、と首を傾げるキュルケ。
…うーむ、異世界だからもしかしたら、と思ってたがどうやら地球とは違うっぽいな。
取り合いず、「あー何でもない」と適当にはぐらかしておいた。
――そんなスッキリしない顔されても、答えに困るんですけど…。

「キュルケは何処にす――アチィッッ！？主にお、俺左手が！」

体が滾る。修学旅行で友人に温泉に投げ入れられた時を思い出した。
何かわからんが頭も熱くなる。
うおおおお、静まれ、俺の左手……。

「すぐ終わるわよ。『使い魔』のルーンが刻まれてるの。我慢しなさい」

「それを先に言えこのやろぉ！？」

「し、知らないわよ！だってアンタ聞かなかったじゃない！」

「理不尽…ぁ…意識が…」

ご主人様（ルイズ）は何故か苛立たしげな声である。
俺が何したってんだ、と　ｏｒｚ　の体制を取る。…あれ、何かしょっぱい。

「…お！引いた引いた」

１０秒もすれば何事もなかったかのように体の熱さが消えた。

…あー。まじでやばかったなオイ、流石の村雨さんでも我慢の限界があるってもんだぞ…？

「…あ「さてと、じゃあ皆、教室に帰るぞ」…」

両腕の力が抜け、再び上げようとした頭が地面へ打ち付けられた。

「何やってるのよ」

☆

Ｓｉｄｅ　Ｒｕｉｚｕ

私は溜息を付く。――やっぱり、この男は変だ。

『コントラクト・サーヴァント』で苦しんでいたと思ったら、今は滝のような涙を流して地に伏せている。
コルベール先生が先生が、ルーンを確認したいのか左手を覗きこもうとしている。

「……にへら」

「…むぅ」

その度に左手を動かして妨害している。…口も笑ってる。
泣きながら笑うなんて、器用ね。
コルベール先生は諦めない。

「…はぁ」

やっぱり溜息を付いた私だった。

☆

「信じられないわ」

「ですよねー」

「別の世界ってどういう事？」

「そのまんまや。メイジが居ない、魔法ない、月が一つしかない」
「そんな世界何処にあるの？」
「どっか」
「真面目に答えなさいよ！平民の分際で！」
「だが断る。へっ、平民がご主人様に教える事なんて一つもねーよーだ！」
「こ、こ、こ、こここ…・」
「こ？」
「こ、この生意気な使い魔は何を言うのかしらねねねね？い、いいい良いわ、こうなったら躾てあげるんだから！」

怒りの余り、頭がフラフラする。
――魔法が成功しないで馬鹿にされているだけでも頭に来るというのに、こんな犬にまで吠えられるなんて…。
イスからガタッ！と私は立ち上がり、そそくさとクローゼット横の棚の引き出しを開ける。
中に入っている物は杖に似たもの。調教用の鞭……。
「えちょ、それってあの、馬をペンペンする奴ですよね！？いやあ

ーそんな物取り出してどうするんですか？え何そんなしならせてるの？！目がギラギラ光ってるよ！うわあ、どう考えてもやる気だな？へぇールイズ様ってそんな趣味をお持ちでしたか、いやあ以外以外！それに顔も真っ赤にしちゃって…震えてますよ？え、風邪ですか？寝てないとだめですよ？ほらールイズちゃん、良い子だからおねんねしましょうねぇ～。＞バギッ＜…折れたよ？おれちゃったよ！？えー勿体ない。ほら、怒っちゃ駄目だろ？って、杖を取り出して何を！？な、ほら、良いから落ち着けってな？良いから下ろして！何杖振り上げてるの！？おぅ、怖ぃ怖ぃ――」

『こんの馬鹿犬ぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！』

☆

【爆符】『エクスプロージョン（無詠唱）』

☆

そして、部屋が白い光に包まれ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8575z/

No.0 no Agasion　！

2012年1月6日03時51分発行